令和6年１１月１０日(日)陸奥新報（１面）

世界が注目「岩木健診」

弘大、弘前市など共同プロジェクト20年

延べ2万人超、3000項目データ蓄積

健康追求 研究を加速

弘前大学健康未来イノベーション研究機構が弘前市などと共同で取り組む大規模な住民合同健診「岩木健康増進プロジェクト」が今年、20年目を迎えた。地域住民の健康状態を多角的に捉え、蓄積された健診データは世界が注目するビッグデータとなっている。健康寿命延伸、地域経済の発展に向けて横断的かつ縦断的研究を加速させ、「ウェルビーイング（心身ともに健康でかつ社会的にも満たされた状態）な地域社会モデルの実現」を目指す。（稲葉智絵）

プロジェクトは2005年、本県の短命返上を目指し、岩木町（現同市岩木地区）の住民を対象に始まった。検査項目は一般的な内科健診に加え、体力、精神面、睡眠、食事といった生活習慣、肌状態や運転機能など参画企業独自の測定が盛り込まれている。その数は約3000項目に及び、頭からつま先まで網羅する。

岩木健診のビッグデータを核に、弘前大は文部科学省などの研究支援事業「COI（センター・オブ・イノベーション）」の拠点となり、多角的に県民の健康寿命延伸に取り組んできた。現在は「共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT＝以下COIネクスト）」の拠点として、健康を基軸に地域の経済発展と若者への働き掛けに力を入れる。

20年間で延べ約2万人以上の超多項目の健診データを蓄積してきた。多因子的解析を可能にする世界に類を見ないビッグデータとあって、疾病の予兆・予防法確立を目指し、これまでに上場企業など24社が弘前大に共同研究講座を開設した。参画、協力大学や研究機関など計80機関以上でデータ分析、研究も進められている。さらに、今年は弘前大発スタートアップ企業を創設し、実社会でのデータの利活用を加速させている。

健康無関心層である若者の意識向上を促すため、岩木健診で培ったノウハウを凝縮した新しい啓発型健診「QOL健診」も開発。検査項目を「メタボ」「ロコモ」「口腔（こうくう）保健」「うつ病・認知症」の四つの領域に絞り込み、健診と結果判定、啓発までを即日行う。今年は明治安田生命保険相互会社が参画して全国への普及が始まった。全国組織の団体の参入も予定されており、さらなる拡大が期待される。

海外支援も進行中で、昨年からベトナムやフィジーの医師らの研修を受け入れ、ノウハウを伝授している。

国内のみならず、世界も注目する弘前大COIネクスト。9月下旬には一橋大でフォーラムが開催され、共同研究を進める大学や企業の代表者らが講演した。オンラインも含めて国内外から約2500人が参加し、ビッグデータの希少価値、研究成果の最前線を聴講した。

同フォーラムで基調講演した、弘前大COIネクスト拠点長兼学長特別補佐兼健康未来イノベーション研究機構長の村下公一氏は「ウェルビーイングな地域社会の実現には健康寿命延伸はもちろん、健康を追求しつつ経済的な活性化が必要」とし、本町キャンパス内に健康科学・ウェルビーイング研究を核に社会実装を図るための共同研究推進施設「データヘルス社会実装研究センター」を建設中であることを明かした。

重ねて、今後の戦略構想について「ビッグデータを求めて、世界から大学や企業が弘前に集結する。ヘルスケア産業の一大集積地として、弘前から革新的研究、新事業を創出し、世界の健康未来を切り開く」と力を込めた。

約3000項目の健診データを蓄積してきた岩木健診＝6月1日、資生堂ブース